

令和6年度 大学・附属学校園連携事業推進経費 成果報告書

<p>所属名</p>	<p>大阪教育大学附属天王寺小学校</p>
<p>研究課題名</p>	<p>体育×ICT ～見方・考え方を意識した分析活動を通して、動きの向上をめざす～</p>
<p>研究課題概要</p>	<p>【課題意識】 令和5年度の共同研究では、ボール運動領域の学習においてICTを活用して、自分たちのプレーや動きを俯瞰的に見て分析する活動を行った。分析活動を通して、ゲームに勝つことに執着するだけではなく、どうすれば作戦が成功するのかを分析する姿が見られ、作戦を成功させるために話し合う姿が多くみられた。「分析すること」に楽しさを感じ、チームの役割として分析官の立場を確立したり、話し合いの場面で自信をもって発言したりすることができた。分析することが自信を与え、チームの中で役割を担ったり、話し合いを促したりした。つまり、「分析すること」は作戦や動きを考えやすくする手立てになること、話し合いが活発にさせることの2点として成果が表れた。</p> <p>令和5年度では、ボール運動領域においてICTを活用した「分析活動」が児童の学びを深めることがわかった。だが、一方でボール運動領域以外ではICTを活用した分析活動を行うことができなかった。また、分析活動の系統や領域性を明らかにすることもできなかった。そこで、令和6年度では、「ボール運動領域以外で効果的なICTの使い方について研究を進める」、「めざす動きにつなげるための分析活動の系統や領域性を明らかにする」という2点に着目して研究を進めることとした。</p> <p>【研究内容】 学習指導要領をもとに、分析における視点を設定した。見方を体の部位（手・首など）・算数的（角度・時間）・理科的（筋肉・関節）とし、考え方を比較・分類・整理・解決方法の検討・評価と分類分けを行った。それを元に、年間を通して児童は分析活動を行うことができた。しかし、学年や領域によって系統性や身につけたい力を整理することはできなかった。</p> <p>体づくり運動領域の学習で、ICTを活用した「簡単にできる運動プログラムをつくろう」の単元を設定した。分析指標として、Feeling ScaleとBorg Scaleを活用した。それらをもとに自分の体の状態を主観的に評価し、それらのデータをスプレッドシートに記録する活動を行った。さらに、心拍数計を着用し、心拍数を可視化させ、客観的な身体の状態を表出させた。心拍数計を活用することで運動強度や自分の疲れ具合などの体の状態を確認することができた。その結果、自分の動きを調整することや、負荷を変えた時の自分の状態はどのように変化するのかを試すなど、心と体の状態を一体化させようとする姿が見られた。運動プログラムの作成活動では、自分たちの運動目的に応じてプログラムを作ることができた。色々な運動を試すことで、自分の得意・不得意の動きを知ることができた。5分という限られた時間でも、負荷の高い運動ができることに気づき、運動内容によって体の状態が変わることを学ぶことができた。</p> <p>【課題】 分析活動の系統や領域性を明らかにすることは難しかった。体づくり運動においては様々な数値データを活用することで分析できるとわかったが、腕時計心拍計などのICT用具を準備する必要がある。つまり、備品が学校にないと難しい面もある。</p> <p>また、簡単にできる運動プログラム作りは自分事にさせないと、子どもたちはプログラムを作ろうとはならない。いかにして自分事にさせ、ブームを作っていくかがカギになると考える。</p>
<p>研究課題の構成員 (リーダーに※)</p>	<p>※大阪教育大学附属天王寺小学校 麓健志郎 表現活動系 橋元真央</p>

※様式は頁数が増えても差し支えありません。